**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第７８回　（２０２１年８月２９日）**

**・勉強範囲：「第三章　ヴィディヤー・シャーゴル訪問」４１頁　下段　L２～**

**📖４１頁下段L２**

**無私の働きによって、神への愛が心に育ちます。それから、の恩寵によって、人はやがてを悟るのです。神は、見ることができます。人は、私があなたに話しているように、に話をすることができるのですよ」**

**（解説）**

人間同士で話すように神とも話せるというのは、特別なことではないですか？　それを皆さんは信じていますか？

（参加者）信じています。

なぜ信じていますか？　見たことあるのですか？

（参加者）ないですけど、それを望んでいるので信じています。そういう意味です。

「信じている」のと「望んでいるので信じている」というのは異なります。もう一度たずねます、信じていますか？

（参加者）神様の化身のお話を今までずっとうかがってきたので、聖書にそう載っているので、信じています。

それがグッド・アンサー、適切な答えです！　「私は神を見たことも話したこともないが、シュリー・ラーマクリシュナが『神を見ることはできる、神と話もできる』とおっしゃっているので信じている」、それがグッド・アンサーです。

なぜそう言えるのでしょうか──「シュリー・ラーマクリシュナは神の化身です。神はつねに真実を実践しておられます。だから嘘を全く言いません。シュリー・ラーマクリシュナはサッティヤ、真実の化身です。シュリー・ラーマクリシュナの言うことは、それが霊的なテーマでも、何であっても、私は正しいと思います」、これがそう言える理由です。現代の世界で、シュリー・ラーマクリシュナほど神について詳しく知り、詳しく語っている方は他にいません。そしてシュリー・ラーマクリシュナは神のことを最も知っていただけでなく、つねに真実の実践をしていました。

「神を見た例」をいくつかお話ししましょう。

**神を見た例**

【例】あるときナレーンドラ（スワーミー・ヴィヴェーカーナンダの出家前の名前）がシュリー・ラーマクリシュナに、あなたは私に執着し過ぎる、それが過ぎると、鹿のことばかり考えていたため鹿となって生まれ変わったバーラタ王の二の舞になってしまいますと叱ったことがありました。子供のように素朴な心のシュリー・ラーマクリシュナはひどく心配になり、「お前の言うとおりだ。では、お前に会わずにいたら、私はどうなってしまうのだろう」とマザー・カーリーの元へ相談に行きました。マザー・カーリーが「お前はナレーンドラをナーラーヤナ（ヴィシュヌ）ご自身と見て、こんなにも愛している。彼の中にナーラーヤナを見なくなったら、もう彼には目もくれないだろう！」とおっしゃったのを聞き、シュリー・ラーマクリシュナは喜びに輝いて戻ってきたのでした。［👉『ラーマクリシュナの生涯　下巻　380頁］

シュリー・ラーマクリシュナは疑問や混乱が生じると、カーリー寺院の祭壇に行き、マザーに話したり相談したりしました。シュリー・ラーマクリシュナ自身はマザー・カーリーが話されたり、座っていたり、ベナレス・サリーを着ているのを見ました。しかし他の誰もそれを見たことはありませんでした。心の病気などの関係で幻影が見える場合がありますが、シュリー・ラーマクリシュナについてそれは絶対になく、本当にマザー・カーリーに会い、見、話をしていました。

次は、シュリー・ラーマクリシュナが亡くなった後、シュリー・ラーマクリシュナと実際に会い、話をしたという例です。

【例】これはシュリー・ラーマクリシュナの肉体が亡くなって間もない頃の、コシポル・ガーデンハウスでの話です。未亡人になったホーリー・マザーはヒンドゥ社会の伝統を守って装飾品を捨て始めました。するとシュリー・ラーマクリシュナがあらわれて、「未亡人のようなことをするなんて。私が死んでしまったというのかね。私はある部屋から別の部屋へ移っただけなのだよ」と言ってそれを止めました。シュリー・ラーマクリシュナは神です。神は永遠なので死なないでしょう？　シュリー・ラーマクリシュナの身体が亡くなったあとの、最初のあらわれがこの例です。その後ホーリー・マザーはブリンダーバンに行きましたが、そのときにもシュリー・ラーマクリシュナはあらわれました。ブリンダーバンに滞在していたためシュリー・ラーマクリシュナの最後に立ち会えなかったヨーギン・マーも、ホーリー・マザーとともにシュリー・ラーマクリシュナを見ました。シュリー・ラーマクリシュナは「どうして皆泣いているのですか」と何回もあらわれ、慰めました。ホーリー・マザーは何度もヴィジョンを経験しています。［👉『ホーリー・マザーの生涯』「師の死とその後」］

【例】またホーリー・マザーは親戚のラドゥの結婚のとき、ヒンドゥ社会の伝統で花嫁のための服などをつめた荷物をつくり、ラドゥの夫の元へと向かいましたが、その荷物の中に、別の用事のためのお金を入れていたことをホーリー・マザーは忘れていました。するとシュリー・ラーマクリシュナがあらわれ「忘れているよ」と教えてくれました。その知らせがなければ、そのお金はラドゥの夫の元へ渡ってしまうところでした。

【例】スワーミー・ヴィヴェーカーナンダがアメリカ行きを悩んでいたとき、シュリー・ラーマクリシュナがあらわれて、「世界で最初の宗教の会議は私があなたのために準備したものです」と言いました。1人でいるはずなのに、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ以外の声がするといぶかしく思ったその家の住人が、翌日、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダにたずねて彼らはそのことを知りました。

【例】渡米後、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダはたくさんの講演をしましたが、話しのアイディアに困ることもありました。するとシュリー・ラーマクリシュナがあらわれて、「あなたこの話をしてください。今から私が話しますから」とスワーミー・ヴィヴェーカーナンダに話しました。それをスワーミー・ヴィヴェーカーナンダは覚えて、それを講話のときに繰り返したのでした。そのようなことは何度もありました。

【例】これはベルル・マトで、プレマーナンダジーに起こったことです──いつものようにシュリー・ラーマクリシュナから外出の許可をもらおうと祭壇の前に行ったプレマーナンダジーは、周囲に誰もいないと思って、声に出して「出かけてもよいですか？」とたずねました。しかしその日の答えは「出かけないほうがいい」というものだったので、出かけるのをやめました。後になって、そのとき乗る予定の舟が沈んだと聞きました。このことについてプレマーナンダジーご自身は何もおっしゃっていませんが、祭壇の隅にいたブラフマチャーリが聴いていたため、私たちは今知ることができます。［👉2021年2月福音勉強会］ブラフマーナンダジーもベルル・マトでシュリー・ラーマクリシュナと何度も会い、話すという経験をしました。

【例】ホーリー・マザーがウドボーダンの家（『ウドボーダン』という霊性の雑誌はここから出版されています）にいらした頃、チャンドラさんという労働者がいました。彼はホーリー・マザーからイニシエーションを受けたマザーの直弟子で、ホーリー・マザーを深く愛し、マザーの命令やお願いをすべて一生懸命に従っていました。マザーがご自分の田舎のジャイランバティに帰るとき、他のお坊さんと共にチャンドラさんも同行したことがありました。そのときチャンドラさんは、「あなたは今まで私にさまざまな恩寵を与えてくださいましたがもう一つ、叶えて欲しい特別なお願いがあります。私にあなたの本性を見せてください」とマザーに頼みました。マザーは外から見ると田舎のおばあちゃんですが、本性はジャガッダートリー女神（宇宙（ジャガッﾄ）を面倒見、支え、維持している女神）です。「その本性を見たい」──その種類のお願いは、本当に特別ではありませんか？　人はそれを見たいです。ですがホーリー・マザーは（特別な信者には見せた。それはとてもとてもラッキーなことです）あまり見せない。ホーリー・マザーからイニシエーションを受けた人たちにさえ見せなかったですね。けれどもチャンドラさんは「お願い、お願い」と言って聞きませんでした。マザーは最初、「いえ、いえ、いえ、いえ、私は知らない」と断っていましたが、最終的には「見せましょう。ですけれども怖がらないでください」と言いました。なぜならシュリー・クリシュナの宇宙的な姿を見てアルジュナが怖がった（『バガヴァッド・ギーター』第１１章）のと同じようになる可能性が大きいからです。そして、周囲にいた人たちには「少し離れていてください」と言い、チャンドラさんには「あなただけに見せます」と言って、ご自分の本当のスワルーパ（real form：姿）を見せました。それがマハー・マーヤーのマーヤーですね。そのときホーリー・マザーのすべてが変化して、ジャガッダートリーの、本当に輝いた姿を、チャンドラさんは普通の肉体の目で見ることができました。でも少しだけ見て、もう見ることはできなかった。ホーリー・マザーはすぐ元の自分の状態に戻られました。

強調したいのは、チャンドラさん以外の人たちは見ることができなかったということです。シュリー・ラーマクリシュナについても同じことで、マザー・カーリーがあらわれても、シュリー・ラーマクリシュナ以外の人たちは見ることができませんでした。なぜでしょうか？　なぜ見える人と見えない人がいるのでしょうか？　なぜホーリー・マザーは見せる人と見せない人に分けたのでしょうか？　どのような状態になったら、神を見、神と話すことができるのでしょうか？

**神の4つの姿**

その前に、大事なポイントを説明します。それは「神には４つの姿がある」ということです。

1) ブラフマン。形もなく性質もない神。つまりニラーカーラ・ニルグナ・ブラフマン。シュッダ・ブラフマン。ピュア・ブラフマン。形がないので見ることも話すこともできない。

2) ブラフマンの別の姿の、形はないが性質がある神。ニラーカーラ・サグナ・ブラフマン。「全知・全能・遍在」、「宇宙を創造・維持・破壊している」という性質はあるが、形は無い。これはキリスト教、ユダヤ教、イスラーム教の神です。

3) 形も性質もある神。マザー・カーリー、マハー・デーヴァ・シヴァ、ヴィシュヌ、ドゥルガーなど。見ることも話すこともできる神はこの３と４です。

4) 神の化身。アヴァターラ。肉体があるときには人とコミュニケーションできる。肉体という粗大なからだがなくなった後もコミュニケーションをとることが可能です。

**神を見るための４つの条件**

では、神を見、神と話すにはどのような条件が必要だと思いますか？

（参加者）神様の存在を信じていること。

たくさんの信者が神の存在を信じていますよ。でも彼ら全員が見たり話したりできるわけではありません。

（参加者）心が清らかであること。

そうです。一番大事なのは①purification of mind、心の純粋さ。そして、②神への愛、私のすべては神ですという態度。③集中して神について考える。最後に④神の恩寵。この４つの条件が必要です。

その条件と今の自分の状態を比べると、なぜ見ることができないのかの答えはすぐに出ます──私たちは①～③の条件ほど純粋ではなく、準備がまだできていないからです。

シュリー・ラーマクリシュナは本当にいます。祭壇にもどこにでも遍在しています。ですが私たちに見ることができないのは、私たちの準備がまだまだだからです。「シュリー・ラーマクリシュナは人生の中心」とまで考えが進んでいないからです。今の状態は、「私には仕事もあります、家族もいます、遊びたいし、楽しみたい」と思うのと同時に、シュリー・ラーマクリシュナのことを考えています。心の収納部屋（storeroom of my mind）に、他の荷物とともにシュリー・ラーマクリシュナの写真も置いているのです。それを変えて、「シュリー・ラーマクリシュナだけ」というところにまで考えが進まないと、シュリー・ラーマクリシュナを見ることはできません。

皆さんどうですか？

（参加者）難しいですね。それは、なかなか日常の中に入ってしまうと難しいです。

「難しい」というのとはまた別のことです。今の状態は「できない」です。もちろん難しいことですが、しかしやる気の問題です。なぜなら「やる気がないので難しい」のですから。やる気があったら、収納部屋からシュリー・ラーマクリシュナ以外のものを全部外に出して、シュリー・ラーマクリシュナだけ置いておきます。霊的な見方では、シュリー・ラーマクリシュナ以外のものはすべてゴミです。そして、「ゴミは一時的なもの。大事なものはシュリー・ラーマクリシュナだけ」、そう考えることができたとき、シュリー・ラーマクリシュナは人生の中心になります。３番目の条件である「シュリー・ラーマクリシュナのことを集中して考える」のも「シュリー・ラーマクリシュナが人生の中心になる」と相互関係にあります。

しかしながら①～③の条件を揃えても、シュリー・ラーマクリシュナに絶対にお目にかかれる、という断言はできません。最後は「神の恩寵」によるのです。これは、お金を払うと絶対会えるというビジネスの話ではありません。神を見る、神を悟るというのは神の恩寵がなければ不可能です。

『福音』の、「神は見ることができます。人は、私があなたに話しているように、彼に話をすることができるのですよ」というたった1行か2行の文章に、ここまで深い意味があるのです。私たちはまず４つの条件を準備しましょう。やがてシュリー・ラーマクリシュナを見て話すことができます。目の前にいる友達と話をするように。

**私たちは本当に神を見たいのか**

しかし、私たちは本当に神を見たいですか？　神と話をしたいですか？　いいえ違います、想像だけで十分と思っています。つまり私たちの願望は浅い種類の願望なのです。だから何も準備ができていないのです。口だけ言って、それで終わり！　神を見るために、何か準備をしていますか？　していないです。「私は神を見たい、神と話をしたい」というのは口だけです。しかし「口だけ」ということは、神はお分かりです。神は私たちの心の中に住んでいますし、神は全知全能ですから。人をだますことはできても、神をだますことはできません。人間をだますのはそれに比べて簡単です。

ですが、心の純粋さを口にする人さえ少ないという、一般的なことを考えれば、それに比べて「自分は本当は不純なものがあるので、純粋になりたい」と思い、口にするのは良いことです──人をだますような種類の人は、中のマスクと外のマスクを二重につけており、自分の本当の姿を人には見せずに、別のイメージを見せてだまします。ですが神をだますことはできません。

ですから失望することなく3つの準備──純粋になる、神への愛を増やす、神のことをずっと考える──をできるだけ一生懸命実践する、それが私たちの義務です。また、それぐらい一生懸命実践すると恩寵があらわれます。それが、シュリー・ラーマクリシュナの言うとても重要なことです。以上のことをよく理解して、もし誠実に、心から、神に会いたいと思って実践するなら、神は恩寵を与えてくださいます。もし１００％の準備がなくても、神の恩寵さえあれば、神を見ることはできます。

**📖４１頁下段L６**

**無言の驚きのうちに、一同はすわって師の言葉にきき入っていた。****彼らには、****知恵の女神みずからがシュリー・ラーマクリシュナの舌の上にすわって、ヴィディヤー・シャーゴルだけでなく全人類に向かって、その福祉のためにこれらの話をしていらっしゃるように思われた。**

**（解説）**

知恵の女神がシュリー・ラーマクリシュナの舌の上に座り、ヴィディヤー・シャーゴルだけでなく全人類に向かいその福祉のために話をしている──このコメントはMさんという特別な人による、特別なコメントです。

これは本当にそうです。この会話は1882年にされたもので、今はそれから139年経っていますが、後世の私たちが読んで本当に助けられています。当時の人たちは皆亡くなっていますが、「言葉」は続いています。それがMさんのすごいところです、100年、200年、300年……とその「言葉」は続きます。

そして考えて下さい、イエスの139年後、ブッダの139年後は、イエスやブッダにとても近くはありませんか？　イエスやブッダは1000年2000年前の方ですが、それに比べて139年はとても短いスパンです。そのことを考えれば、シュリー・ラーマクリシュナの会話から139年後の時代に生きる私たちは、シュリー・ラーマクリシュナの時代ととても近く、とてもラッキーです。

私は今から50年ほど前の1972年、ベナレスで、ホーリー・マザーの親戚でありタクール（シュリー・ラーマクリシュナ）とも親戚だった「ボスマティ・マー」という女性に会いました。そのときおそらく80歳位で、私が会った翌年に亡くなりました。彼女はホーリー・マザーともシュリー・ラーマクリシュナとも直接会ったことがあり、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダなどシュリー・ラーマクリシュナの直弟子たちとも会ったことがあるだけでなく、ホーリー・マザーとシュリー・ラーマクリシュナをとてもとても愛していました（彼女の回顧録は興味深いものがたくさんあります）。私はその彼女に会いましたが、そのようにホーリー・マザーやタクールに直接会った人の中に、ホーリー・マザーやタクールを見れば、すぐにホーリー・マザーやタクールに会えるのではありませんか？　タクールは、「イエスは、『息子を見ている者は、父なる神をも見る』と言った」と言いました。父（神）の存在は、息子（神を見ている人）の中にあります。

ところで、（ベンガル語の本の）「バグバディニ」は日本語では何ですか？

（参加者）「知恵の女神」

知恵の女神とは学問の女神、マザー・サラスワティです。日本では弁天様ですね。その女神がシュリー・ラーマクリシュナの舌の上に座って話をなさいました。ヴィディヤー・シャーゴルは単なる媒体（medium）です。シュリー・ラーマクリシュナはヴィディヤー・シャーゴルを介して、私たちに話をしておられるのです。

**📖４１頁下段L１１**

**夜の九時に近かった。師は帰ろうとなさった。**

**師（微笑して、ヴィディヤー・シャーゴルに）「私が話した言葉はほんとうは余計なものです。あなたはこういうことは全部知っておられる。ただそれを意識しておられないだけだ。**

**（解説）**

「意識してない」とは「気づきがない」ということです。しかしヴィディヤー・シャーゴルは、「ヴィディヤー・シャーゴル」つまり「学問の海」［＊ヴィディヤーは学問、シャーゴルは海の意］という称号をもらったほど、聖典の勉強をしたサンスクリットの学者でした。もちろん哲学もよく勉強したことでしょう。ですからシュリー・ラーマクリシュナは「全部知っておられる」と言ったのです。ですがその人に、「意識はない」「気づきはない」というのはどういうことでしょうか？

ヴィディヤー・シャーゴルは「神」はそれほど大事なことではないと思い、興味を持ちませんでした。興味がなかったので、気づきもありませんでした。彼にとっては、人を世話する慈善活動のほうが大事でした。

もちろん本当のことを言えば、実は、勉強していてもしていなくてもそのことは関係なく、私たちはサット・チット・アーナンダなので私たち皆の中に知識はあるのです──問題は、「気づきがない」ということです。前世のサムスカーラが良かったとか、幼少期から神が好きな人には気づきがありますが（シュリー・ラーマクリシュナの直弟子は皆そうでした）、他のほとんどの人には気づきがありません。

ではどのようにして気づけばよいでしょうか？

インドでは神の寺院、神のお祭り、神の祭壇、神にお供え、周囲の人たちの祈りの姿など、生活の中に神と近しい雰囲気があり、その中で育った人には、無意識のうちにその波動が入ります。それによって気づく可能性があります。

もう一つ。神聖な交わり、つまり僧侶の話、信者同志の話、本からの勉強が窓口となって気づく可能性もあります。何も知らなかった人が、ある日図書館で偶然シュリー・ラーマクリシュナやスワーミー・ヴィヴェーカーナンダの本を読み、素晴らしいと思い信者になった、ラーマクリシュナ・ミッションの僧になったという実例はあります。

霊的生活は、そのような霊的な「気づき」から始まっていくのです。

**📖４１頁下段L１４**

**ヴァルーナの金庫の中には数えきれないほどの宝石があります。しかし彼自身はそれを知らないのです」**

**ヴィディヤー・シャーゴル（微笑して）「お好きなようにおっしゃるがよろしい」**

**師（微笑して）「おお、そうですよ。自分の召使の名前を全部は知らない金持ち、また自分の家にある数々の貴重品さえも知らない金持ちがたくさんいます」（みな笑う）**

**［＊以上の部分を読んで、講話は終了］**

**（Q＆A）**

**参加者：**今の自分の目標は「心をきれいにすること」なのですが、普段の生活への関心というか、興味もやっぱりたくさん残っていて、それを減らすにはどうしたらいいでしょうか？

**A：**それを減らすのは自分の責任です。あなたは力の限り努力し、そして神に祈ってください。それ以外の手段はありません。具体的にどうするかは、個人個人の状況が異なるので私の答えも異なってきます。誰にでも共通して助言できる大事なことは、「努力する」です。「忙しくて時間がない」という問題は本来あり得ず、それはやる気があるかないかという話です。

（具体的には）たとえば仕事のときにできるだけマントラを唱える。なぜなら私たちは仕事のとき、散歩のとき、入浴中、いろいろなことを考えていませんか？　そのような「いろいろなこと」を考えるのではなく、代わりに神様のことを考えます。

本当は、実践したいなら、時間がないという問題はありません。絶対に、いっぱい、時間はあります。ですけれどもマーヤーの影響で、神のことを考えずに一時的なことをたくさん考えているのです。なぜなら心はその種類のことを考えるのが好きで、神のことを考えるのを好まないですから。私たちは今、心の命令で、そのような状態になっているのです。

**参加者：**でもどうして心は（神を）好きじゃないんでしょう？

**A：**それはあなたが自分にたずねてください。心の今の状態は清らかではないので、ですから粗大的なものが好きで、粗大的なものへの理解があります。心を純粋にして心が精妙になると、心は精妙なものを好きになります。神は精妙なものですから。心が精妙になったら、神のことをもっといろいろ理解することができます。

心が何を考えるかは本人が決めることで、私が決めることではありません。つまり心の考えをどうしたら変えることができるかは、あなた自身にかかっているのです。ですから心を清らかにする努力をしてください。時間がない、忙しいと言わないで、努力をし続けてください。

**（賛歌奉献）**（映像データの１：５１：２０頃）

「トゥミ　ブラフマ　ラーマクリシュナ」

Tumi Brahma Ramakrishna tumi Krishna tumi Ram;

Tumi Vishnu tumi Jishnu prabho Vishnu pranaram;

Tumi adheya adhara tumi Brahma nirakar;

Tumi nara rupadhara vijita-kanaka-kam;

Apara karuna-sindhu tumi deva dina-bandhu;

Jache Indu kripa-bindu charane kari pranam.

（訳）あなたはブラフマン、ラーマクリシュナ、あなたはクリシュナ、あなたはラーマ、

あなたはヴィシュヌ、あなたは維持者、主ヴィシュヌ、生命（主）ラーマ、

あなたはささえる者であり、ささえられる者、あなたは形なき霊、

しかも、あなたは人の形をとった、あなたは金と欲望の征服者。

無限の慈悲の大海である、主よ！　あなたはいやしい者の保護者、

恩寵(おんちょう)のしずくを願い求めてインドゥはあなたにひれ伏すのです。

（ベンガル語）　作：シャラト・チャンドラ・チャクラヴァティ

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　以上